

瀬戸内赤穂から北前船がもたらしたものの全国版第10号

赤穂市教育委員会平成28年10月23日提出



かつて赤穂の差塩（にがりを含む塩）は、米沢で10倍の値がついた人気の塩でしたが、これが「赤穂の天塩」として再現され、当時の「製塩用具」は国の重要有形民俗文化財になっています。今回は瀬戸内の塩が苦難な時代、それを乗り切った赤穂塩の話です。

瀬戸内と日本海には大きな価格差があった塩（気候など製造面などの条件で価格差があった）で坂越等の北前船が大きな利益を出していました。しかしそれはやがて瀬戸内の生産者も塩に苦しめられる事になっていくのです。品質が良く驚く程安かった瀬戸内の塩は、日本海の塩生産に1690年頃から影響が出始め、やがて殆どの地域で塩の生産が出来なくなっていた事が、新潟県史や山形県史に載っています。赤穂塩で北前船が莫大な利益を出していた話が司馬遼太郎の小説（菜の花の沖）にもありますが、この事で瀬戸内では大きな塩田が各地に次々に誕生して生産過剰に陥り長期の塩田不況を招きました。こうした事から、瀬戸内でも休業や借金から廃業に追い込まれる苦しい時代が長く続きました。赤穂藩内では松前迄の他に、江戸迄の主要港にも販路があり、大消費地大阪に近かった事、休浜替持法（一定期間の定められた面積の塩田での塩の生産を停止するための法律）や製塩燃料の転換から、長かった塩田不況を乗り切る事ができました。この製塩燃料について、佛教大学で千原義春さんが卒論で述べていました。千原さんには、坂越まち並みの会を創る会の、企画に賛同して頂け、最後のまとめの部分 요약して掲載が出来ました。

(矢竹考司)

赤穂塩業と製塩燃料について

投稿者 千原義春（佛教大学大学院修士課程・歴史学専攻）

製塩において、煎熬に用いる燃料の確保は極めて重要な問題であった。近世に入って塩田開発が進むと、薪類の需要が増え、それまでのように塩田周辺だけではその需要をまかなえなくなった。そこで、塩田所在地に流れ込む河川の上流部や他領からも薪類を移入するようになる。しかし、製塩燃料としてのみならず都市生活の発展に伴う家庭用燃料への需要も拡大したことで、薪類は供給不足となりその価格は高騰した。薪値の上昇は、塩田濫造が要因の不況に拍車をかけた。そうした状況の中、塩田不況打開策として休浜替持法とともに導入されたのが石炭焚である。塩業者らは、製塩燃料として石炭を利用することにより生産費を抑制でき、不況を乗り越えられたのである。

赤穂で用いられた石炭は、当時の史料によると、全て肥前国から廻送され、その年間移入量は天保から嘉永頃までの平均でおよそ4900ト^トであった。

製塩燃料として石炭を導入で、コスト削減や技術の発達等のメリットがあった。一方で、塩田労働者や塩田に薪類を供給してきたその生産者の収入減といった問題も生まれたが、赤穂では、この問題は上方市場に近いという経済的地理的条件により特に発生しなかった。本稿では、塩田不況打開のための、もうひとつの不況対策の休浜替持法に関しては、ほとんど言及していない。石炭焚には、「生産費を減少せしめ塩業合理化をはからんとする、休浜法の一分野を占めるもの」という側面があり、石炭焚と休浜替持法は密接不可分の関係にあるといえる。

また、石炭焚の開始によって塩田経営が持ち直したことを、総生産費に占める燃料費の割合にのみ着目して考察した。だが、例えば明治初年頃の場合、石炭代が急騰しその費用の総生産費に占める割合は高くなったものの、燃料費以上に塩価が上昇し、大きな利益をあげることができたという。このように、燃料費が高騰したにもかかわらず利益の出た年があったことを鑑みると、石炭導入による塩田経営の改善を論じるには燃料費に注目するだけでは不十分であったといえる。それ故、塩田経営全般を俯瞰したうえで石炭導入の利点を検討すべきであろう。さらに塩業史の観点から、江戸期後半になって誕生し、一時は日本一の塩田の持ち主だった田淵家のような豪農と、その経

済活動等を手掛かりに、近世社会が変容し、やがて近代へと移行していった過程を考察することも今後の課題としたい。

発行者 門田守弘（坂越のまち並みを創る会会長）